

## 「チュラロンコーン大学スプリング派遣参加報告書」

京都大学 農学研究科 修士1年 松村寛子

私は学部1年生のときにタイを訪れ、タイ北部の農業見学やタイの大学生との交流を通じて東南アジアに興味を持つようになった。当時の記憶を顧みると、タイの気候は年間を通して温暖であり、広大な山地で粗放的に農作物を栽培していたように思われる。未整備な農地では機械化が困難であり、カボチャやイモなど重量のある野菜の収穫も人力に頼る部分が多いという印象を受けた。一方で、環境に優しい農業の取り組みも始まっており、例えばエビの養殖では、養殖池に蓄積する化学物質や排泄物などを除去することで、持続的に養殖池を使用していた。今回のオンライン留学では農業の授業はなかったが、チュラロンコーン大学の先生方から、タイの農業の分岐点ともなり得る話を聞いた。タイ北部では5年ほど前から、焼き畑から生じる微粒子による大気汚染が深刻化しているが、タイ政府はミャンマー由来の微粒子であると説明しているという。責任を他国に転嫁することは望ましくない。焼き畑は計画的に行えば環境への負荷を小さく抑えることができるため、政府あるいは県からの適切な指導によって営農形態を変えることは可能であり、将来的にはタイ政府が自国の農業を強化し、環境保全型へ転換することが予想される。私は日本の農業に関する仕事に携わりたいと考えており、将来日本の農業とタイの農業の協同事業が起こることがあれば、あるいは事業を起こすことができれば、積極的に参画したい。

今回の短期留学はオンラインでの参加だったが、タイの文化や歴史などについて深く学ぶことができた。勉強する以前は仏教を中心とした国というイメージだったが、実は元来タイに存在した精霊信仰に仏教やヒンドゥー教などの宗教が融合して現在の宗教観が生まれたということを知り、日本の神仏習合との類似点に気づくことができた。加えて、タイでは仏教が生活に根差していることも学び、寺院参拝や朝の托鉢の準備を頻繁に行うほか、公務員や一部の企業では出家休暇を設けるなど、日常生活で仏教との関わりが薄い私にとってたくさんの驚きがあった。また、近隣諸国間の活発な人の移動によってミャンマーや中国、マレー系などの影響を受けた言葉や伝統工芸品、料理などの紹介があり、タイの地域ごとの特徴を比較したことはとても興味深かった。タイの政治についても少し触れたが、自国の政治に関心を持ち、自身の意見を持ったうえで議論をするタイの学生の姿勢はすばらしいと感じた。日本では政治に関して自身の意見を表明することは少なく、特に若者は政治に無関心であることが多いと言われる。私自身もこれまで政治や政策について深く考えていなかったもので、政治について語れる環境に身をおくこと、そして自身の考えを言語化することを意識づけていきたいと感じた。

最後にタイ語の勉強について述べたい。タイ語は京都大学とチュラロンコーン大学で2度学習した。京都大学では留学直前の一週間前に、タイ人の大学院生から自己紹介や簡単な会話、数字などをオンラインで教わった。発音や作文練習など、アクティブな授業形態でタイ語に少しずつ慣れることができ、知っている単語が増える喜びを感じることができた。自身の研究活動でお忙しい中、タイ語を教えて頂いた大学院生に感謝申し上げたい。チュラロンコーン大学では授業の半分がタイ語の勉強であり、タイ語の先生からは言葉だけでなく、その背景にある意味についても丁寧に教わった。ほぼ毎日、3時間タイ語を楽しく学ぶ中で、タイ語で話せる内容や聞き取れる語彙が増え、二週間だけの留学だったがタイ語をぐっと身近に感じる事ができた。日本人の拙い発音だったが親切に聞き取ってくださり、最後まで楽しい授業を提供して下さった先生に感謝申し上げたい。今後もタイ語の勉強を続け、タイを訪れる機会ができた時には、タイ語で現地の方々と交流できるようにしたい。

末筆だが、海外への渡航が自由にできない状況の中、オンライン留学を開催して下さった両大学の関係者の皆様に心から御礼申し上げますとともに、タイの留学と一緒に参加した学生との出会いに心から感謝申し上げます。